

# 高 一 學 習 指 導

一 月 號

思潮·經營·教材研究誌



學 習 指 導 研 究 會 編 輯 小 學 館 發 行



# 建國の理想を憶ふ

法學博士 大川周明

如何なる川も決して當初より大河でない。黄河、揚子江の大を以てしても、その源に溯れば、竟に谷間の小川である。たゞ幾多の支流を合せ、落ち來る總べての水を東海に嚮はしめ行く間に、おのづから千里の長江となる。まことに一切の長江大河の偉大は已れに注ぎ入る一切の水に、嚮ふところを與へることに存する。河江はかくすることによつて、同時に已れを豊かにし大きくし、強くする。

このことは、吾等の精神的生活に於ても同然である。個人の魂、而して民族の精神もまた、決して生れながらに豊富・壯嚴・偉大ではあり得ない。それは博く學び、細かに思ひ、篤く行ひ、その魂に入り來る一切を擁護して嚮ふところを之に與へることによつて、歩々偉大となり行くのである。それ故にニイチエは、偉大とは「方向を與へることだ」と道破した。方向を與へること嚮ふところを知らしめることが、取りも直さず偉大なる魂の力である。この力を具へたる魂は、總べてを受け

容れて己れの精神を豊かにし、且かくすることによつて、一切のものに眞個の意義と價值とを與へる。

然るに方向を他に與へるためには、必ず自ら目指すところ、行き着かんとするところがなければならぬ。これありて初めて總べて己れに入り來るものを率ゐることができ、總べてを率ゐつつ己れを偉大ならしめることができる。目指すところ、魂の擡ふところは、言ふまでもなく理想である。それ故に吾等の魂の發展と充實とは、確乎不動の理想ありて初めて可能である。かくして偉大なるべき魂は、何をさておき先づ莊嚴偉烈なる理想を堅確に抱持する魂でなければならぬ。

## 二

日本精神の數ある特徴のうち、その最も著しきものは、入り來る總べての思想・文明に「方向を與へる」ことである。それ故に吾等は日本精神を偉大なりとする。そはまさしく一切の支流を合せて其れを大海に擡はしめ、且之によりて己れを豊かならしむる長江大河の偉大である。吾々は先づ支那思想及び文明と接觸して之を吾有とし、次いで印度思想及び文明と接觸して之を吾有とした。亞細亞精神の取極ともいふべき此等の思想並に文明は、實に日本精神によりて正しき方向を與へられたるが故に、今日まで其の生命を護持し長養されて來た。支那思想の精華、從つて支那文明の根底は、孔孟の教ではないか。而して其の教が日本に生きて支那に死んだのだ印度文明の精華といふべき佛教に就いても亦同様である。佛教は遂に印度を興し、又は救ひ得ざりしのみならず、印度も佛教を生かし得なかつた。今や佛教は、僅かに錫蘭島セイロンに於て小乘の信仰者の少數を有する以外殆んど印度にその跡を絶つてしまつた。第二の故郷ともいふべき支那に於ても、今や佛教は漢譯藏經と堂塔伽藍とを殘して、過ぎし世の盛大を偲ばしむるに止まり、支那民族の信仰生活と風する馬牛となり果てた。獨り吾が日本に於てのみ佛陀の福音に含まれたる。一切の要素が、その登るべき至高の階まで高められ、今日猶國民の宗教的生活を律する生きたる信仰となつてゐる。

日本民族が早くより支那及び印度の思想文明と接觸せることは、これをして精神的に支那の一省か、若しくは印度の一植民地たらしめ易いやうに思はれる。さりながら巨巖の如き國民的自尊と有機的統一とは、亞細亞文明の兩極より押し寄せる

時に於ても、それ等の文明の奴隷となることはなかつた。日本民族の最も光榮とする誇は、單に政治的のみならず、その道徳的宗教的、乃至藝術的生活に於て、寸毫だも外來の影響のために、自家の眞面目を傷つけられざりし事である。

斯く言へばとて、吾等の態度を彼の支那人が濫りに他國の文明を蔑視し、自らその固陋に甘んずるが如き笑ふべき矜高と同視してはならぬ。他國の文明に對して、恰も楚人が越人の肥瘠を見るが如き無感覺を以てするは、支那人の態度である。然るに吾等は、亞細亞大陸に咲き香へる文化の花の輸入せらるゝ毎に、つねに新なる感激に胸を躍らせて來た。最初三韓文明に接したる時も、吾等は他國民の追従を許さぬ敏感と、驚嘆すべき自由なる批判的精神とを以て、仔細に之を觀察し熱心に之を研究した。而して此の嚴肅なる努力は、それ等の文明を遺憾なく了解して、之を國民的生命の内容として攝取し了るまで續けられた。盲目的崇拜は、吾等の斷じてせぬ所である。同時に偏狹なる排斥も、亦吾等の決して敢てせぬ所である。これを歐羅巴に對して言ふ時、亞細亞は渾然たる一如をなして、西洋文明と相對する東洋文明を成してゐる。固より東洋精神は、異なる國土に於て異なる表現をなしてゐる。而もそれ等は皆、一つ大洋に起伏する女波男波に過ぎぬ。亞細亞諸國の文明は、みな統一ある亞細亞を物語る。然るに此の「複雜の中に存する統一」を、わけても鮮かに實現して、亞細亞の一如を最も十全に發揮するのが、常に日本國民の光榮ある特權であつた。而して世界に比類なき皇統の連綿とし未だ曾て異邦の征服を受けざる崇高なる自尊と、先祖の思想、感情を保つに至便なる地理的位置とが、日本をして亞細亞思想及び文明の護持者たるに適せしめた。されば吾等の今日の意識は、實に亞細亞意識の綜合であり、吾等の文明は全亞細亞思想の表現である。日本文明の意義及び價値は實に此の點に存する。

### 三

支那を見よ。王室の顛覆、塞外民族の入寇、兇暴なる民衆の掠奪、總べて此等の出來事が幾度となく繰返された爲めに、今日殘る所のものは、唯だ唐代諸帝の光榮と宋代社會の文雅とを偲はしめる文學や遺跡があるに過ぎぬ。その文明の根底をなせる儒教及び老子教の精神は亡び果て、此の精神が生み出したる美はしき藝術も、打續ける天災や戰亂のために消え失せた。又之を印度に見よ。アンナオクヤアレキサンドリヤの帝王をして、その威を仰がしめたる阿育王アサカの壯嚴も、今は唯べい

ルートや佛陀伽耶の頽れた石垣に悲しき面影を留めるに過ぎぬ。詩聖カーリダーサの筆すらも、尙且盡し難かりし超日王の比類なき榮華も、覺めて跡なき美はしき夢となつた。婆羅門の聖地の水は涸れ、佛陀の教は生命を失つた。印度藝術の壯麗なる作品は、蒙古人の狼藉と、回々教徒の狂暴なる偶像破壊主義と歐洲傭兵の無理なる亂暴とによりて、殆んど其の姿を失つてしまつた。我等は唯だアジャンタ窟寺の彫壁や、エルロラの彫刻や、オリツサの彫岩や最後に今日の日用品によりて僅かに過去を懐ひ得るに過ぎぬ。然るに獨り日本に於てのみ、亞細亞の歴史的富が護持されて來た。孔老の教も、佛陀の福音も、其の最も美はしき果實を此國に於て結んだ。而して其等の理想の具體的表現なる藝術も、此の國に於てのみ持ち傳へられたる貴き遺品によりて、時代を逐ふて迎ふことができる。而して日本が能くかくの如くなるを得たのは既に述べたる如く、日本精神が、一切に方向を與へる力を具へてゐるためであり、而して能く一切に正しき方向を與へることができるのは取りも直さず正しき理想を抱くが故である。

然らばその理想とは何か。吾等の祖先が此の國を肇むるに當り、全心全靈を擧げて確立せる理想は實に「あまつひつぎのみさかえ、あめつちとともにかぎりなけむ」ことであつた。げに日本建國の理想は、此の一句に盡され、此の一句こそ、古事記・日本書紀の中軸である。古事記・日本書紀の神代卷に於ける自餘一切の立言は、要するに此の一事を莊嚴にするためのものといふことが出来る。

萬世一系の理想は、餘りに屢々口頭に上せられた爲に、今の世の人々は却つてその中に含まるる深奥なる意義を反省しようとしぬ傾がある。而も單に之を外面のみに就いて見るも、古代諸國の建國思想の中、かくの如く雄渾にして確信に充ちたるものが他にもあるか。吾等の知る限りに於ては、僅かに秦の始皇帝が朕を始皇帝とし、二世三世より傳へて萬世に至らんと豪語した。而も實際は僅かに二世にして亡國となつてしまつた。支那の學者は、始皇帝の抱ける如き萬世一系の理想を以て罵笑すべき不可能の夢となし、革命即ち王朝の交替を當然の事とした。然るに吾が國に於ては、支那に於て談罵の種とされるこの理想を奉じ、能く之を實現して今日に至り、更に未來水劫に及ぼさんとして居る。そはまさしく人類の歴史に於ける一個の不可思議である。曾てマコーレーは、羅馬法王朝に就いて下の如く論じた。曰く「地上に於て人間の作りし事業のう

羅馬教會の如く研究の價值あるものは稀である。この教會の歴史は、人類文明の二大時期を繋ぐものである。犠牲を燒く煙がパンテオンより上りし時、フラビヤの圓戯場にジラフと虎とが驅け廻りし時まで人心を溯らせ得るものは、世界に於て唯だ此の教會だけである。世界に於て其の系圖の遠きを誇る最も永續したる王室も、之を羅馬法王朝に比すれば、其の年齢は赤兒の如く稚い」と。然るにわが皇室は、法王朝に比して一層久しい歴史を有してゐる。若しマコーレーとて日本の皇統連綿を知つたならば、一層その驚を大にしたに相違ない。

加ふるに天つ日嗣、天壤と共に無窮なることは、更に重大なる内面的意義を有してゐる。わが日本民族は、此の理想を堅確に把持し來れるが故に、今日在るを得たのである。皇統が萬世一系なる爲には、日本民族が萬世に獨立し繁榮することを必須の條件とする。それ故に萬世一系といふことは、直ちに日本國民の永遠の發展といふことを意味する。國亂れて民亡ぶ而して國亂れて民亡ぶ原因は、如何なる例外もなしに、主權が薄弱微力となるからである。それ故に日本の古典が、日本を以て「天雲へ向伏す限り谷蟻の士渡る極み、皇御孫命の大御食國」となし、若し「御代々々の間に、まつろはぬ穢き奴もあれば、神代の古事のまに」、大御稜威をかがやかして、たちまち打滅し給ふものぞ」として、吾國の主權を萬古不動の礎の上に置きたまふことは、まさしく國家永遠の繁榮の礎を置けるものである。

#### 四

さて、天皇とは「天神にして皇帝」の意味である。吾等の祖先は、天神にして皇帝たる君主を奉じて、此の日本國を建設した。而して吾が國は文字通りに神國であり、天皇は現神であり、天皇の治世は神世であると信じてゐた。試みに萬葉集を讀めば、吾等は隨所に「すめらぎは神に在せば」といふ歌詞に接する。當時の人々は、其の奉事せる天皇の世を直ちに「神世」と呼び、天皇の行幸を「天降」といひ、彼等自身を「すめらぎの神の官人」と呼んでゐた。いはゆる「神ながらの道」とは、天皇が神のまに、日本國家を治め給ふ道であり、同時に、日本國民が神のまに、天皇に仕へ奉る道のことである。

天皇を神と仰ぐ日本國民の信仰は、歐米人には容易に理解し得ないとしても、東洋に於ては決して會得するに難からぬ信

仰である。試みに孝經を繙けば、「孝は父を嚴にするより大なるは莫く、父を嚴にするは天に配するより大なるは莫し」といふ一句がある。天に配するとは、父に於て天を認めること、即ち父を天とすることである。それ故に禮記には「仁人の親に事ふるや天に事ふるが如く、天に事ふるや、親に事ふる如くす」と説いてゐる。そは父母に對する孝行が、其の本質に於て宗教的なることを明示するものにして、家族に於ける父母は、家族生活に於ける宗教的對象となつてゐるのである。宗教とは、自己の生命の本源を認識して、之を敬愛し之に隨順することである。父母は取りも直さず吾等の最も直接なる生命の本源なるが故に、之を敬愛し之に隨順することは、最も根本的なる宗教である。而して吾等は、父母より溯りて一家の祖先に及び、之を一層高く生命の本源として崇拜する。多くの家族が結合して部族を形成すれば、諸家族の共同祖先たる部族神が各家族の祖先よりも一層高位の神として崇拜される。次いで多くの部族が一個の國家に統一せられるに及び、部族全體の祖先が國祖として國民崇拜の對象となる。然るに多くの國家に在りては、内外幾多の原因によりて、建國當初の國家的生命が中斷または斷滅した爲に、國祖に對する宗教的關係も、自ら消滅せざるを得なかつた。それ等の國々に於ては、國家の生命の本源たる國祖を認めず、直ちに宇宙全體の本源たる神を天父として仰いでゐる。唯だ吾國に於ては建國このかた今日に至るまで、國家の歴史的進化、一貫相續して中絶せざりしのみならず、國祖の直系連綿として國家に君臨し給ふが故に、國民の天皇に對する關係は、其の本質に於て父母に對する子女の關係と同一である。子女が父母に對して正しき關係を實現することが、取りも直さず孝である。同様に日本國民が、天皇に對して正しき關係を實現することが忠である。さればこそ、吾が國に於ては、古より忠孝一本と言はれてゐる。そは日本の天皇は、家族の父、部族の族長が、共同生活體の自然の發達に伴ひて國家の君主となり以て今日に及べるが故である。即ち日本に於ては、國祖に於て國家的生命の本源を認め、國祖の直系であり、且國祖の精神を如實に現在まで護持し給ふ天皇を、神として仰ぎ奉るのである。吾等は永遠無窮に一系連綿の天皇を奉じ、盡未來際この國土に據り、祖先の志業を繼承して歩々之を遂行し、わが國體をしていやが上に光輝あるものたらしめねばならぬ。

編輯後記

神代より、亂れぬひと筋の足音をつゞけてきた皇紀二千六百年の朝は、今や我々の前面に蒼茫と開いた。▲世界の東も西も、亂雲の下に裸體を噛み合せて、季節の鋭い風ともつれ新しい歲月の頁を忘れてもるやうななかに、わが大和民族だけは、この輝く空の奥にかけた梯子をつたつて神代にさかのぼる。▲東亞の新秩序、光は東方より——この神代よりの意志は、我々の體內に漲りわたつてゐるのを感じる。▲こゝに意義深い新年號を江湖に送る。▲巻頭先づ大川博士に、「建國の理想」を聽かう。次に汪精衛（汪兆銘）氏の聲を、火野葦平氏の「戦塵」を、▲百田宗治氏の「紀元二千六百年のはじめに」の詩は、子供のためにとあるが、子供のためのものと限るべきではないのである。▲「新秩序」といふ熟語は現代の合言葉になつてしまつた。それほど、東亞はさて置き國內の諸社會層が、前進の一途に生きたための亂れ、秩序を求めてゐるやうである。教育界の上層に立ち、單めたこの苦悶の霧をとらへたのが文學だとすれば、その文學が果して如何なる質のものであつたか、又此後如何なる方向に進み得るものかどうかを一應確かめておかねばならぬ。▲評論家青柳優氏はこの渦巻く霧のなかへ、

氏獨特のメスをきつと突き立て、忽ちジグザグに切り裂いた。「文學と教育者」や「綴方」のもだくした世論は、こゝに一物も残さず解決された筈である。▲おなじみの日案筆者麻生、長沼兩先生の新春心象風景、我々は何かを教へられる。▲間もなくやつてくる新學期に、また幾人もの轉校兒童を見ることが思ふ。この不幸な兒童たちの取扱ひを、後藤若男先生の一文を通して、今から十分心準備しておいて戴きたい。▲「歐米の禮法」は近く實現する國民學校の教科に對する示唆を多分に含んでゐると確信する。▲第九回芥川賞候補の光田文雄氏の小説、ラヂオでおなじみの西山氏の童話、川崎高小校高等二年生の山口孝一君の純真な「實習日記」はいづれも新春誌上の光輝であると自負する。▲諸賢のよき春を教壇の上に祝福しつゝ。

八教育雜誌

尋一	尋二	尋三	尋四	尋五	尋六	高一	高二
學習指導	學習指導	學習指導	學習指導	學習指導	學習指導	學習指導	學習指導
定價 各冊 金五錢 送各料	定價 各冊 金五錢 送各料	定價 各冊 金五錢 送各料	定價 各冊 金五錢 送各料	定價 各冊 金五錢 送各料	定價 各冊 金五錢 送各料	定價 各冊 金五錢 送各料	定價 各冊 金五錢 送各料

學習指導研究會編

不許複製

昭和十四年十二月十八日印刷納本  
昭和十五年一月一日發行

編輯人 石相賀正  
發行人 石相賀正

印刷所 東京市神田區  
印刷所 東京市神田區

發行所 小學館  
電話九段一四一八番  
電話九段一四一八番

振替 東京四五一〇七番  
大阪一〇二五番  
仙臺六二三八番

注意

◆本誌の御注文はすべて前金のこと  
◆御送金はなるべく振替貯金のこと  
◆振替用紙は郵便局に願ひます  
◆郵券代用は一律増に願ひます  
◆相互の利益ですから成べく半年分  
◆一年分の御購讀をお願ひ致します  
◆臨時増刊特別號等は定價不同につ  
◆き御申込金の最後決算の際不足額  
◆を頂戴いたします  
◆前金切の場合は封筒に前金切の捺  
◆印をいたします

購約録

料	購	約	録
(共 送)			
外國一ヶ年分	金十圓七十六錢		
一ヶ年分	金六圓九十二錢		
六ヶ月分	金三圓五十三錢		
三ヶ月分	金一圓八十錢		
普通號一冊	金六十三錢		

本誌は満支・鮮・臺  
樺に於ては別記現地組  
合の公認賣價を認む  
本誌送料二錢五厘  
別冊別送六錢  
外國送料四十錢

特價一圓三十錢

本誌は全國各地書店にありまらず一萬の切品の際直は接本社へ